HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	巻頭言
Author(s)	川田, 学
Citation	子ども発達臨床研究, 18
Issue Date	2023-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/90579
Type	bulletin (other)
File Information	020-1882-1707-18.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

巻 頭 言

附属子ども発達臨床研究センターでは、2011 年から「発達支援学」を旗印に、宮﨑隆志教授をリーダーとして対人援助をめぐる実践と研究を往還する領域横断プロジェクトを推進してきた。その過程で、川田を代表として「異年齢期カップリングの発達学 : 子どもの生きづらさを超えるための学際的協働」（基盤 B）が採択され、2015～2018 年度にかけて異年齢・多世代を必須の構成とする保育・教育実践や地域の居場所実践について、その実践論理の言語化に取り組んだ。「異年齢期カップリングの発達学」の成果は、『子ども発達臨床研究』の特別号として、10 号（2017）と 12 号（2019）の 2 冊が公刊されている。

“異年齢期カップリング”、すなわち、子どもが関わる相手の年齢や世代によって多様な姿を見せること、ある年齢期と別の年齢期の組み合いにより現象する出来事の規則性を探る試みは、十分な成果を得たとは言えないものの、各方面から参照される内容をわずかながらも創りだすことができた。現代の「子ども理解」が暗黙の前提とする同年齢ないし年齢別での人的環境は、人間理解の均質化に拍車をかけているのではないか。その年齢主義を背後で支えてきた知性に発達心理学があることを、完全に否定できる者はいないだろう。

本特別号は、異年齢期カップリング科研の続編ともいえる「保育における『子ども理解』形成のローカル・ダイバーシティ」（挑戦的研究・萌芽）の成果をまとめたものである。本来、2018～2020 年度の 3 ヶ年のプロジェクトであったが、調査研究が本格化しようとする 2 年目の冬に、新型コロナウィルス（COVID-19）がやってきた。保育現場に出入りしての調査、離島や僻地への訪問を方法的な軸にしていた本科研は大きく制約を受けることになった。結局 1 年間の延長を行ったものの、繰り返しやってくる変異株と感染拡大の波を乗り越えるには至らなかった。

とはいえ、2020 年 2 月までに行うことのできた調査と、新型感染症との付き合い方を多少なりとも覚えながら実施できたいくつかの調査をもとに、本特別号「保育における『子ども理解』形成のローカル・ダイバーシティ」を刊行することとした。所収論文には、未だアイディアの端緒を散りばめた段階のものもあるが、将来のトランスフォーマティブ・リサーチのシーズを発掘する役割をわずかでも果たせたならば望外の喜びである。

本科研の推進に当たっては、数多くの方々にご協力をいただいた。逐一お名前を挙げることはできないが、ここに記して感謝申し上げる。

with コロナになるのか、after コロナになるのか、未だに確たる見通しが得られない。こういう鬱屈した時代に、やさしい色味のカバーでくるんだ冊子を届けたいと思う。

研究チームを代表して　川田　学